
エイプリルフル

灯月樹青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エイプリルフール

【Nコード】

N3128D

【作者名】

灯月樹青

【あらすじ】

ずっと前についた嘘。キミは今も――？

(前書き)

2007年のエイプリルフールに書いた作品です。このたびクリスマス編を載せるにあたり掲載しました。

抜けるような青に、俺は目を奪われた。

ここらで一番高い木に登って見上げた空は、どんな場所から見た景色よりも、深く俺の心に刻み込まれている。

『すぐ行くから、あの木の下で待ってろよ』

そういったあの日から、俺は今日までこの木に上ったことはなかった。

「あれからもう12年経つんだなあ」

久しぶりの特等席で、眼下に広がる町並みを見下ろし、感慨深く呟く俺ももう20歳。

1月に成人式を終え、あと半年ほどで21になる。

この12年間、あまりにも色々な事がありすぎた。

頼りになる好きだった父が亡くなり、母の実家の近くに越したのが12年前。

引越した先で友達を作り、人間関係を充実させながら、母が再婚し、父というべき人ができたのは8年前。

高校受験に四苦八苦し、なんとか入った高校を父となったあの人の転勤で違う高校に編入。

勉強の集大成とも言える大学受験を終え、大学を理由に一人暮らしすることになり、引越しを無事に終えて、2年間必死に履修した。

来年からは最低限の単位だけで平気だ。

大学の勉強も一段落して、そして実家に帰ったとき、残っていた荷物の中に一つのメモを発見した。

とても幼い、拙い字で書いた手紙――。

幼い頃、とても大好きだった彼女に書いた、出せなかった手紙――。

出せずにしまい込んだ手紙――。

幼い頃に確かな気持ちをまだ覚えてばかりの字で書きとめた。

そして渡そうとしたあの日、手紙を渡す替わりに着いた嘘――。

あの時、笑顔が崩れた彼女の涙を見たくなくて、必死についた嘘――。

涙を溜めながら、けれど満面の笑みで笑った彼女の顔が瞼の裏に映る――。

「あいつ、どうしてんのかなあ」

あれから12年。

自分もあの時の少女ももう成人し、いい大人になりつつある。

別れの日、結局引越す事を彼女に言うことはできなかった。

彼女の事が気になるが、引越したらしくて連絡先もわからない。

だからこそ、今日、この日にこの場所に來たのだ。

あの日も今日と同じエイプリルフルだったから。

もしかしたらここにいるんじゃないかと思って――。

木に登るなんて久しぶりだった。

最後に登ったのはまだ鼻を垂らしたガキの頃だったと思う。

昔から高い所が好きだった俺は、何かあるたびにこの木に駆けあがり、そこから空を見上げていた。

隣にはお転婆な女の子が、キラキラと輝かした目で同じように街をみていた。

いつも一緒だった。

何をするにも一緒にいた。

離れてしまったあの日までは――。

「やっぱり……いないよな」

自重気味に思う。

約束したわけでもない彼女がここに来ると思う方がおかしいのだ。

「――帰るか」

木の上から見える景色をあとにし、木を下りる。

昔は気にしなかったが、それなりにしっかりした枝でないと自分の重さに耐えられない。

そんな所にも年月を感じた。

街並みから外れた、こだかい丘の上に立つ大きな木。

少し他の木より離れた所にある木が、俺等の遊び場だった。

夕暮れには真っ赤に染まった太陽を一望できる秘密の場所――。

ちようど、今のよう――。

「――変わらないな……」

どんなに月日が経っても変わらないものがあつたことが嬉しい。

『――ようちゃん、そろそろ帰ろっか』

懐かしい声が聞こえた。

遠慮がちに俺を呼ぶ彼女の声――。

もう一度呼んで欲しいと強く願う……。

「――よう……ちゃん？」

耳が――、声を拾う。

反射的に振り返る。

あるはずもないであろう奇跡を信じて――。

「…ようちゃん」

そこにいたのは知らない女性だった。

ただ、その仕草が何処か重なって見える…。

今思っていた彼女と――。

「――…あけちゃん？」

微かな声を喉から絞り出す。

信じられないという想いとともに、幻ではないかと目を見張る。

瞬きした瞬間に消えてしまわないように…。

けれどニツコリと笑ったその顔はまだ幼く、昔の面影が色濃く残る。

「やっと会えた――。やっと、嘘になったね」

泣きながら笑う彼女が、驚いたように目を見開く――。

俺の腕の中で――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3128d/>

エイプリルフル

2010年10月17日07時26分発行